

# 『フィロカリア』 編纂とその意義

袴 田 玲

## 序

修道生活と祈りの指南書として東方キリスト教世界に大きな影響力を持ったと言われる『フィロカリア』であるが、そこに集められた著作の多くは、東方キリスト教世界において自ら修道生活を送った師父たちによって後輩や同輩の修道士への助言として元来著されたものである。とくに『フィロカリア』の中心的主題であるヘシユカスムは、絶えざる祈りのうちで心身を浄化し、ついには神と一つになること（神化）をめざす独特の修行である。俗世から隔絶されたアトス山の修道士たちによって、霊的師父の指導の下に実践されていたこのような修行のための導きが、なぜ

## 序

0. 『フィロカリア』について

第一部 『フィロカリア』編纂の背景

I-1. オスマン帝国下のキリスト教

I-2. コリュヴァデス論争

I-3. ニコデモス・ハギオリテとマカリオス・コリントス

第二部 『フィロカリア』の意義―ニコデモスによる『フ

イロカリア』序文より―

II-1. 神化への招き

II-2. 神化と救い

II-3. 万人の神化

総括

一つの書物として纏められ、出版されたのか。その目的はいかなるものであったのか。このような問題を、当時の歴史的背景を概観しつつ（第I部）、同書の編纂者ニコデモス自身の言葉から読み解く（第II部）ことが本稿の目的である。収録されたそれぞれの著作の作者についての研究が世界中で蓄積され、邦訳の出版も進むなか、今一度編纂者たちの声に耳を傾けることによって東方キリスト教世界における『フィロカリア』編纂、出版の歴史的意義を考えてみたい。

## 0. 『フィロカリア』について

『フィロカリア』とはギリシア語で「美への愛」を意味し、古くから「選集」や「詞華集」を指す語として用いられてきた<sup>1)</sup>。本稿で扱う『フィロカリア』には四世紀から一五世紀の東方キリスト教世界に生きた師父たち三十余名の全六三作品<sup>2)</sup>が年代順に収められており、先にも述べたとおり、そのほとんどは修道生活と祈りについての教えや格言である。収録されている著作家のなかでもっとも頁数が多いのは証聖者マクシモス（一七八二年の初版で

一六三頁）、次いでダマスコのペトロス（一四一頁）、ゲレゴリオス・パラマス（八五頁）、クサントプロスのカリストスとイグナテイオス（八三頁）と続き、もっとも少ないものでは修道士テオフアネスのようにわずか二頁の作品（抜粋？）によって『フィロカリア』にその名を留めている者もいる。

『フィロカリア』は一七八二年にヴェネチアで初版が出版されて以降、一七九三年にモスクワで教会スラブ語訳が出され、さらにロシア語やルーマニア語といった正教圏諸言語に訳され広範な読者を得た（それに対し、ギリシア本国では初版『フィロカリア』はさほど大きな反響は得られず、一八九三年になるまで改訂されることもなかった。一九五七―六三年にかけてアテネで新たな版が印刷され、現代ギリシア語訳の出版は一九八四―八七年にかけてなされた。このようなギリシア本国における『フィロカリア』への鈍いとも思える当初の反応については後述（注23参照）。

西欧世界においては、『無名の順礼者』あるロシア人順礼者の手記』（原題 *Окровенные рассказы странника духовному своему отцу*、日本語訳は重訳）の翻

訳によってすでに『フィロカリヤ』の存在は知られていたものの、J. Gouillard による仏語抄訳 *Petite philocalie de la prière du cœur* が一九五三年になって出されると大きな反響を呼び、同書はドイツ語、スペイン語、イタリア語、アラビア語に訳された。また J. Gouillard の仏語抄訳に先立つ一九五一年には、E. Kadloubovsky と G. E. H. Palmer によってロシア語訳からの重訳ながら英語抄訳 *Writings from the Philokalia on Prayer of the Heart* が出版され、その他に確認できる限りでも英語、ドイツ語、フィンランド語、ポーランド語による部分訳が出されている。『フィロカリヤ』へのこのような高まる関心の後押しされるかたちで全訳作業が各国で始められ、英語 (Palmer *et al.* 1979-1995、第五巻は未刊)、フランス語 (Bobrinsky & Touraille 1979-1991; Clément 1996)、イタリア語 (Artoli & Lovato 1982-1987) 訳がこれまでに出版されている<sup>(3)</sup>。本邦では、上述の *Writings from the Philokalia on Prayer of the Heart* の翻訳 (つまりロシア語訳からの重訳のさらに邦訳) として『修徳の実践心の祈り (イエスへの祈り) に関する著述』が一九九五年にエンデルレ書店から出され、二〇〇七年以降は新世社から

全訳が刊行されている (第一、三、四、五、七、八巻が既刊)。

## 1. 『フィロカリヤ』編纂の背景

### 1-1. オスマン帝国下のキリスト教

ヘシユカスム論争終息から一世紀を待たずして、ビザンツ帝国は一四五三年にオスマン帝国の手によって滅ぼされる<sup>(4)</sup>。当時のオスマン帝国下は、信仰する宗教ごとのミツレット制分割統治によって諸民族と信仰の一大混合体を統治していた。統治者であるイスラムのミツレットにつぐ規模の正教徒のミツレット<sup>(5)</sup>は、かなりの程度自治を認められており、「啓典の民」として一定の敬意をもって迎えられていたようである。

しかし、それでも正教徒はオスマン帝国下ではラヤ (家畜の群れ) という意味から転じて「臣民」と呼ばれ、数々の制約を課されていた<sup>(6)</sup>。また、オスマン政府にエリート兵士や官僚として仕えるために、バルカン半島のキリスト教徒の家庭から最も見栄えのよい利発な子が不定期に徴発され、集められた者はイスラムに改宗しなければな

らなかつた。

さらに、自治権の見返りに、正教徒の共同体を指導する立場の総主教はスルタンの臣下として忠誠を誓わなければならず、スルタンは総主教の叙任権をもった。総主教職が替わるたびに、スルタンの首相は巨額の賄賂を受け取るようになり、総主教の側でもその支払いのために賄賂を受けざるを得ず、こうして賄賂の受取が横行し、少なくとも高位聖職者層において当時の正教会内部は「腐敗と派閥人事にまみれていた」という点は研究者の見解の一致するところである<sup>7)</sup>。事実、ビザンツ帝国がオスマン帝国下に入った一四五三年から『フィロカリア』編纂の一七八二年までの約三三〇年間でコンスタンティノープル総主教となつた人物の数はのべ一六人、その中で複数回総主教となつた(復位した)者はのべ四五人に及ぶ。そもそも再任が認められていないはず総主教の座にのべ四五人も的人物が復位していること自体、高位聖職者人事における腐敗を物語っているが、総主教のべ一六人という数値は、たとえば一〇〇一年から一三三〇年までの同じ約三三〇年間ではのべ四八人(うち再任二人)と比べても極めて多い。一八世紀のあるアルメニア人銀行家は「ギリシア人は下着を取り

替えるよりも多く総主教を替える」と皮肉を述べている。

汚職が蔓延する教会高位聖職者の傍らで、一般信徒および修道士たちの信仰生活はどのようなものだったのだろうか。一般信徒および修道士の間では変わらずに正教信仰は健全に保たれていた、あるいはヘシユカスムの精神性は生き続けていた(K.Ware)とする見方もあるが<sup>8)</sup>、修道司祭バタピオスと大主教クリュソストモスは当時の修道士が聖体拝領に与る頻度の減少傾向(年に回数程度)を指摘した上で、「東方教会の教義的人間理解と救済論、すなわち orthodoxy」と「その中で人間存在が活発に神化され救われるような実践的神秘的(秘蹟的)生活、すなわち orthopraxy」の一体性・つながりの深い理解が失われたことがその要因であると論じており<sup>9)</sup>、オスマン帝国下におけるヘシユカスムの潮流の減速傾向を認めている。

他方、一八世紀後半には、ギリシア知識人のあいだで、新たなギリシア・ヘレニズム主義(民族運動)が広まった。この運動は、当初は反キリスト教的というわけではなかったのだが、ビザンツ(キリスト教)時代を通り越して古代ギリシアにその理想を見いだし、手本とすべきはビザンツの教父・師父たちではなく、古典期の作家たちであるとし

商人たちは一七七〇年代から一八一〇年代にかけて起こった知的復興を物質面で支え、これが民族意識の発達に極めて決定的な要因となった。この意識は、正教会の教徒としてのアイデンティティではなく、ギリシア人としてのアイデンティティだった。商人たちは学校や図書館を寄進し、もっぱら帝国の外で盛んにおこなわれるようになったギリシア人読者向けの出版事業に出資した。世俗の文献の出版も増えていった。一八世紀最後の四半世紀に出版された書籍の数は、初めの四半世紀の七倍に達し、一九世紀初めの二〇年間には、およそ一三〇〇点の書籍が出版された。恐らく最も重要なのは、商人が奨学金を出し、ギリシアの若者が西欧の大学とりわけドイツの大学で学べるようにしたことだ。そこで留学生たちは啓蒙思想やフランス革命やロマン主義的なナシヨナリズムなどの急進的な思想に接し、ヨーロッパの教育ある同時代人の精神に古代ギリシアの原語や文化が驚くほど浸透しているのを知った。トルコクラティアの時代、古代ギリシア世界につ

いての知識は絶えかけていたが、芽吹いたばかりの知識階級は西欧の古典研究から刺激を受け、自分たちが文明世界では普遍的に崇められている遺産の継承者であるという自覚を持つようになった<sup>11</sup>。

以上見てきたように、ギリシア正教会高位聖職者の腐敗と、一般信徒や修道士の間に生じていた *orthodoxy* と *orthopraxy* との断絶、知識人らのキリスト教信仰の軽視などが、『フィロカリヤ』編纂を要請した時代背景として挙げることができよう。そして、「ギリシアの国と教会の再生は、師父たちの醒めていて (*neptic*) 神秘的な神学の回復による他はない」と信じたのがニコデモスらコリュヴァデスと呼ばれる人々だったのである。

## 1-2. コリュヴァデス論争<sup>12</sup>

修道司祭パタピオスと大主教クリュソストモスによると、一四世紀におけるヘシユカスム論争以来、アトスの修道院共和国を揺るがした最大の事件がコリュヴァデス論争であるという。事の発端は一七五四年アトスの聖アン修道

院で起きた死者の追悼の儀式を行う曜日を巡る論争であった。古くから、正教会では死者の追悼儀礼を土曜日、もしくは週日に行っており、当時のアトス山では土曜日の朝に行われるのが通例であった。というのも、日曜日は、主の復活と死に対する勝利を表象する——死からの脱却と永遠の生命を願う喜びの日——と考えられていたからである。ところが、聖アン修道院内の一部の修道士が、修道院内に建築中だった共同教会の完成を急ぐために、死者の追悼儀礼を日曜日に行うようになった。この動きに対して、日曜日に死者の追悼儀礼を行うことは古来よりの伝統からの逸脱であり、すぐれて教会の聖なる伝統の護り手であるべき修道院の性格に全く反するとして反対の陣を張ったのがコリュヴァデス（死者の追悼儀式の最後に割って食べられる煮た小麦コリュヴァから。彼らは、追悼儀式の土曜日における遂行の固持から土曜日派サバフテイノイとも呼ばれる。共に敵対者による蔑称）である。

この論争はただちにアトス山全体に広まり、改革派は保守派・伝統主義者であるコリュヴァデスを攻撃し、追放するよう動いた。この時期、実際に多くのコリュヴァデスはアトスを離れた全ギリシア（とりわけエーゲ海の島々）に

散らばったが、ニコデモスの場合がまさにそうであるように、これは結果として全ギリシアにコリュヴァデスの思想や教育を広める結果となる（後述）。事態の鎮静化を図るための総主教の二度の布告<sup>13</sup>や地方公会議の決定<sup>14</sup>にもかかわらず、一八二一年のギリシア革命前夜まで、コンスタンティノーブルのファナリオトス階級をも巻き込んで争いは続いた。一八一九年、総主教グレゴリオスV世はこの論争を完全に終わらせるために、追悼儀礼が「他の週日同様、土曜日と日曜日の区別なく行われるよう」命じ、この論争に終止符が打たれた。

そして死者の追悼儀式の曜日とほぼ同時に起こった議論が、頻繁な聖体拝領についての問題である。悔悛の時を除いて奉神礼ごとに聖体拝領をすべきだという意見と、聖体拝領は適切な間隔を置いて年に数回程度なされるべきだという意見があり、当時のギリシアにおいて実態は後者に近いものであった。しかし多くのコリュヴァデスは、前者の意見に与し、特にマカリオスとニコデモスは「頻繁な聖体拝領について」という冊子を出版してその中心的役割を担った。この著作に対して、反コリュヴァデスのグループから激しい反対運動が起き、この運動に圧された総主教によ

って断罪を受けた。その後一七八九年には再調査が行われ、先代の総主教による断罪が解かれて、この著作が教義に即しており、すべてのキリスト教徒に薦めるものであるとの布告がされた<sup>15)</sup>。

### I-3. ニコデモス・ハギオリテとコリント府主教マカリオス

このコリユヴァデス論争の中心的存在となつてゆくのがニコデモス (Nikodemos the Hagiote, 1749-1809) とコリント府主教マカリオス (Macarios of Corinth, 1731-1805) であつた。以下、主に C. Cavarnos, *St. Nicodemus the Hagiote* および *St. Macarios of Corinth* に拠つて二人の人物の生涯を概略する<sup>16)</sup>。

ニコデモスは一七四九年にエーゲ海のナクソス島に生まれ、その地で初等教育を受けている。そこでのニコデモスの師は、聖コスマス<sup>17)</sup> (Cosmas of Aetolia, 1714-1779) の兄弟で修道院長でもあつたクリュサントスであつた。ギリシアの人々を道徳的靈的に目覚めさせ、平易で直接的か

つ情熱的な言葉づかい (ニコデモスは膨大な作品のほとんどをギリシア民衆語 vernacular で著した) で人々を教化するという後のニコデモスの思想の基礎は、クリュサントスを介した、聖コスマスの影響によるところが大きいと Carvanos は評価している。卒業後はスミルナにある当時繁栄していた神学校 (Evangelical school) に通つた。これらの学校では正教教育と世俗教育が組み合わされておられ、スミルナでは外国語教育もされていたので、ニコデモスは卒業までにラテン語、イタリヤ語、フランス語を習得した。このことは彼の西欧思想やラテン教会への理解を助けることとなる<sup>18)</sup>。卒業後ナクソスに戻り、地元の司祭の秘書として働いていたところに、ニコデモスはマカリオスとの最初の出会いを果たす。すでに道徳的靈的学識の高さで評判だつたマカリオスは、そこでニコデモスの修道士になりたいたいという希望を後押しし、また、両者は将来、オスマン帝国下で抑圧された同胞の啓蒙のために協力することで一致したという。この時期、ニコデモスはヘシユカストでありビザンツの神秘家たちの思想によく通じていたシルヴェストロスという人物に出会う。彼の推薦書を携えて、二六歳の時にニコデモスは聖山アトスに向かうことになるわけだ

が、アトスに向かう前にもう一つ重要な出会いがあった。それがグレゴリオス、ニーフォン、アルセオスという三人のコリュヴァアスとの出会いである。先述のとおり、当時多くのコリュヴァアスはアトスを追われてギリシア中に散らばっており、各々の滞在先で彼らの教えを説いていた。この三人のコリュヴァアスも、ニコデモスに正教の伝統の厳密な固持を訴えたという。

ニコデモスがアトスに赴いてから二年後、マカリオスが彼のもとに来て『フィロカリア』『エウエルゲートイノス』、『頻繁な聖体拝領について』の校訂・編纂の仕事を任せた（『エウエルゲートイノス』の原本は一一世紀にテオトコス・エウエルゲートイノス修道院の創設者である修道士パウロが編纂した砂漠の師父たちの言行録集で、それにマカリオスが大幅なテキスト校訂を施し序文をつけたものである。『頻繁な聖体拝領について』は年に二、三回しかされない同時代の聖体拝領の習慣に対し、頻繁な拝領を推奨する目的で著され、主の祈りの詳しい説明にはじまり、正教徒が主の身体と血に頻繁に与るべきこと、それによって救いへと導かれることが説かれ、最後には彼らの対立者の意見を取り上げて、新約聖書、師父たちの著作、使徒

たちや公会議の教義を引きながら、それぞれに反駁している）。彼らの本は大きな議論を巻き起こし、反コリュヴァアス派からの誹りを受け入れることを潔しとしなかったマカリオスはアトスを去ることになる。

さて、これら三作品においてマカリオスとニコデモスの果たした役割の比重に関する評価は、研究者によって異なる点であるが、多くの場合、テキストの選択に関してはマカリオスが担い、ニコデモスはそれに大幅な校訂、註釈を施して序文を付したとする見方で一致している。『フィロカリア』に関して言えば、明確にニコデモスの手にとされているのは全体の序文、および収録されているそれぞれの作者（師父）の作品冒頭に付せられた紹介文である。マカリオスがどのようにして元となる写本を収集・選択したのかは明らかでないが、彼がアトス山に到着する以前にすでにいくつかのテキストは先人の手によって収集されており、『フィロカリア』を編纂するにあたってそれらテキストも利用されたようである<sup>20</sup>。いずれにせよ、収録されている師父たちの名前と作品を概観すると、総主教・主教など教会内での要職に就いた者や教義史に名を残した者というよりは、実際に修道士として修道（ヘシユカ



スム)の實踐を積んだ師父たちが好んで選択されていることは明らかである。こうして、マカリオスとニコデモスの共同作業によって編纂された初期の三つの作品はスミルナへわたり、地元の有力者で神学校の運営の中心人物であったヨアンネス・マウロゴルダトスから出版印刷費の援助を受けて、一七八二年(『フィロカリア』以外の二作品は一七八三年)ヴェネチアで出版の運びとなった。

彼らはその後も、正教会の伝統を復興し、ギリシアの人々を古の師父たちおよび初代キリスト教徒の實踐へと回帰させることを使命として、砂漠の師父たちからビザンツに至るまでの教父や師父たちの著作の収集・編纂・出版および教育に力を注いだ<sup>21)</sup>。マカリオスはアトスを追放されてからも、多くの他の追放されたコリュヴァデス同様に、ギリシアの各地でその思想を伝え、説教や修道院の創設を通じて当地の人々にとっての靈的覺醒者、改革者となったという。彼らが担ったこのようなトルコ帝国下の正教世界における——ときにヘシユカスト・ルネサンス(K.Ware)やヘシユカスム・リバイバル(C.Cavarnos)と呼ばれる——靈性復興運動の最初にして最大の成果が『フィロカリア』であったと言えよう。

## II. 『フィロカリア』の意義——ニコデモスによる『フィロカリア』序文より——

さて、ここからは『フィロカリア』出版に際し編纂者の一人ニコデモスによって付された序文を検討し、それによって同書の出版に託された彼らの思想に迫ってみたい<sup>22)</sup>。

ヴェネツアで出版された初版『フィロカリア』の表紙に刻まれたタイトルはこのようなものである。『聖なる覺醒者たちのフィロカリア——本書は聖にして神を担うわれわれの師父たちの著作からの集成である。本書において、知性ノイテイコスは、実践と觀想に即した倫理的な哲学(知への愛)を通して、淨化され、照明を受け、完成される。本書は大変な労力を費やして校正され、今や印刷によって本書の第一版が出版された。この書は、最も名譽があり、最も敬虔なるヨアンネス・マウロゴルダトス殿の出資を通して、正教徒の共通の利益のために出版された——』。そして序文が以下のようにつづく。

神、至福な本性、すべての完全性を超える完全性、す

べての善と美の創造主でありながら、善と美を超える原理、その神は、永遠の昔から、その神的原理において人間の神化を決定しておられ、始めからこの目的を自分の内で考えておられたが、好機到来と思われたときに人間を創造した……。

この序文から読み取れるニコデモスの思想から、特筆すべきと思しき点を三点ほど挙げる。

## Ⅱ-1. 神化への招き

序文中でもっとも強調されているのが、神化という主題である。原文でわずか六頁の文章中に、神化 θεοποίησις という単語が名詞形・動詞形あわせて一七回（「神と成る」や「神と一つになる」などの単語も含めると二四回）も使われ、神が人間の神化をその創造の当初から意図していたこと、そして人間存在にとっては神化されることが究極の目的であることが繰り返し説かれる。

(1) 神は永遠に人間本性の神化を意志しておられ、その

心の思いは世々につづく……

(2) もしひとが神法を守るなら、むくいとして人格に深く根差す神化の恩恵を受けるわけである。その恩恵とは、神と成り、最も淨い光において永遠に輝くことである。

しかし、このような神化の恩恵に信を置きつつ日々の修練を積む者が見受けられなくなったとニコデモスは当時の状況を嘆く。

(3) かつては、世俗に生きた多くの人々、つまり王自身や王宮ですごした人々は、毎日生活上の責任や配慮で多忙であったが、唯一の同じ業、つまり心の中で絶えず祈ることを実行していた（史実に多くの例が見出せるように）。けれども今日、怠慢と無知が原因で、残念なことにこのような（靈的な）人々を俗人の中にも、修道士の中にも、隠者の中にも見出すことはまれで難しい。

(4) しかも驚くべきことには、われわれはたとえ恩恵が他の人に働いていると聞いても、嫉妬するばかりであり、今の世に恩恵のエネルギーが働いていることさえ信じないのである。

ニコデモスは、世俗の間はおろか修道士や隠修士までが絶えざる祈りの実践をおろそかにしていると同時代人を批判している。かつてグレゴリオス・パラマスが説いたような神のエネルギーの思想も、もはや人々の心から離れてしまっているようである。本稿の第I部で概観したような教会の高位聖職者の汚職、一般信徒や修道士たちの信仰実践の衰退、アトス山におけるコリュヴァテス論争など、当時ニコデモスを取り巻いていた状況が透けて見えるような慨嘆ぶりである（実際、『フィロカリア』の翌年に出版された『エウエルゲートイノス』においては、教会当局へのより直截な批判が展開される<sup>(23)</sup>）。そんな中、ニコデモスらにとって、古の師父たちの言葉は魂の寄す処のごとく映ったのであろう。

(5) 大多数の師父は……その著作の中で覚醒への注意

を語り、覚醒的と呼ばれており、真実に知恵への愛を伴って、アレオパギテースの言う浄化・照明・完成の営為について探究している。同時にこれらの書はすべて、一つの方向すなわち人間の神化を目的としており、そのための必要な手段であり仲介者なのである。それなのに、これらが古くて稀少なことから、あえて言えば、編集されたことがなかった。

(6) 見よ、ここに以前決して刊行されなかったものがあるのだから。見よ、ここに闇に棄て置かれ隠されていたもの、棄てられ虫に食われあちこちに散逸していた書があるのだから。見よ、ここに心の浄さと知性の覚醒とわれわれの内なる恩恵への呼びかけとさらに神化への呼びかけ、これらすべてに向けて知識の方策によって導くものがあるのだから。親愛なる読者よ、あなたはこの霊的な書物を手にしている。覚醒の宝物、知性の見張り、観想へ導くまがうことなき指針、……一言で言えば、神化の方策である書物を。

このように『フィロカリア』にはまさに神化へ至る教科

書・手引書としての役割が期待されていたことがわかる。

## Ⅱ-2. 神化と救い

また、ここで重要なことは、神化と救いが同義とされる点である。

(7)もし知性<sup>ノリス</sup>が神化されなければ、人は聖とされ救われることはできない。ここで聞くだけでも空恐ろしいことは、神的知恵の啓示によると、救われることと神化されることは同じだということである。

一四世紀のアトス山において盛んとなったヘシユカスムにおいても、神化はつねにめざされる目標であった。しかし、それは祈りの専門家としての修道士・隠修士が、文字通り日夜独居房にこもって祈り、心身を浄化しきつた後にいわば最高の到達点として享受するものであり、一般の信徒にとってあまねく期待しうるものとは考えられていない。それに対し、ニコデモスの説く神化とはすなわち救いを意味し、信徒のひとりひとりが責任を負うものである。

このように、神化という言葉をより広い意味で解釈することによって、ニコデモスはヘシユカスムの歴史のなかで重要な役割を果たしていると言える。

## Ⅱ-3. 万人の神化

神化が救いと同一視されることによって必然的に、それは修道士や隠修士だけでなく、すべての信徒に関わる問題となる。かくして、キリストに信を置くすべての者が絶えざる祈りを実践するよう鼓舞される。

(8) 『フィロカリア』編纂・出版の「仕事に到達した」のは、自分の考えに従ってではなく、模範から出発したることなのである。一方では、それは聖書の模範である。それは区別なくあらゆる信徒に対して、絶えず祈ること（一テサロニケ五・一七）、常に主を自分の眼前に仰ぐことを求めている。そこに何か障害があるとか、聖霊の掟を担うのは不可能だとか言うのは、偉大なバシレイオスによると不敬虔なことである。

(9) かつては、世俗に生きた多くの人々、つまり王自身や王宮ですごした人々は、毎日生活上の責任や配慮で多忙であったが、唯一の同じ業、つまり心の中で絶えず祈ることを実行していた（史実に多くの例が見出せるように）。

(10) 神の宴を軽蔑しない人々よ、福音書における人々（ルカ一四・一八一—二〇）とは反対に、田畑や牛や妻を口実とはせずに（宴に来る）人々よ。あなたがたは来たれ。来て、この書にある知恵の覚知的なパンを食べよ。そして心を知性的に楽しませ、他方で自己超出による神化を通して、すべての感覚的かつ知知的な諸物から離脱させるブドウ酒を飲みたまえ。そして真実の覚醒した酩酊で酔いたまえ。来たれ。正統信仰（orthodoxos）の呼びかけに与るあなた方よ、一般信徒として修道士よ。

さらに、『フィロカリア』の末尾を飾るべく編入された『パラマス伝』<sup>24</sup>は、次のような叱咤激励ではじまる。

キリスト教徒である兄弟たちよ、いかなる者も、絶えず祈るのは司祭や修道士のみ義務であり、世俗の者の義務ではない、などと考えるはならない。そうではない、そうではないのだ！ 絶えず祈りに留まるということは私たちキリスト教徒すべての義務なのだ。

はじめにも述べたように、『フィロカリア』に収められた作品群の多くは、修道士によつて修道士のために著されたものである。一般の読者には一見あまり関係のないように思われる厳しい戒律や修行についての内容も含まれ、一二〇〇頁以上にわたる全体のなかには似たような記述に繰り返し出会うこともあり、読者を戸惑わせることもあるだろう。しかし、同書は特殊な世界を対象とした教導的作品の単なる寄せ集めではなく、ニコデモスらの明確な思想の下に編まれた、強いメッセージ性を帯びた書物であるということがここまでの考察で明らかになったと思う。救いとは教会や司祭によつてもたらされるものではなく、個人個人がその責任を負うものであるという意識をもち、絶えず祈ること。このような或る意味で近代的な信徒像への転換をニコデモスは訴えかけているのであり、『フィロ

「フィロカリア」はその自覚を各人において呼び起こすよう、題名にあるとおりまさに「正教徒の共通の利益」となるよう願って編まれた書物であると言えよう。一七八二年の初版出版当初から、ロシアをはじめ正教圏で広い読者を獲得したこと、さらに二〇世紀に入ってから西欧世界においても熱烈に歓迎されたことは、『フィロカリア』のこのような性格からして当然の成り行きだったのかもしれない。その意味で『フィロカリア』の編纂と出版は、ヘシユカスムの歴史にとつて重要な出来事であつただけでなく、正教会における近代を、より広くは信仰と近代の問題を考える上で多くの示唆を与えるものであると言えよう。

### 総括

ヘシユカスムという俗世から隔絶されたアトスの修道院で実践されていた靈的修道のための導きが、なぜ一つの書物として纏められ、出版されたのか。その目的はいかなるものであつたのか。この問いに何らかの回答を与えることが本稿のねらいであつた。本稿で確認できたことは、オスマン帝国下の正教会高位聖職者の腐敗と、一般信徒や修

道士の間に生じていた orthodoxy と orthopraxy との断絶、知識人らのキリスト教信仰の軽視などが、マカリオスとニコデモスらに正教の靈性復興の必要性を痛切に感じさせたということ（第I部）、またコリュヴァデス論争の最中で、アトスから追放される危険性に晒されながら編まれた『フィロカリア』という書物が、単に祈りの専門家としての修道士のみならず、追放された先々の地において一般信徒をも靈的に目覚めさせ神化へと導くための手引書の役割を当初から期待されていたことである（第II部）。祈りの特権的な場であるアトスの修道院世界を出なければならなかつたことが、靈的な祈りの方法を『フィロカリア』という手引書に収めて外の世界に持ち出す結果となつたわけだが、一般信徒は精神修養などせず、それは修道士に任せにおいて、自分は教会に行つて司祭の説教を聞いていればよいという或る意味で中世的な信徒像から、自らの救いを教会や修道士任せにしない自発的近代信徒像への転換を同書はメッセージとして有しており、それこそが近現代のキリスト教世界で同書が東西の別なく広く支持された理由であつたのだと考えられる。

注

(1) 東方キリスト教世界においては、本稿で扱う『フィロカリア』以外に、カエサレアのバシレイオスとナジアンゾスのグレゴリオスによって編纂された同名のオリゲネス選集がよく知られている。

(2) 以下は A. Casiday (ed.), *The Orthodox Christian World*, Routledge, 2012 所収 pp.453-465, V. Kontouma (Conticello), “The Philokalia” および E. Citterio and V. Conticello, “La *Philocalie* et ses versions” (C.G. Conticello and V. Conticello, *La Théologie byzantine et sa tradition* [以下 TB へ表記], Turnhout, Brepols, 2002 所収 pp.999-1021) をもとに作成した『フィロカリア』の構成すなわち作者名、作品名「出典情報」、初版『フィロカリア』(ヴェネチア、1782)における頁数、および邦訳の底本となっているアテネ版(1957-63)における巻号と頁数。各作者の和名表記は邦訳『フィロカリア』、新世社、二〇〇七年、第一巻、訳者大森正樹による総序一四―一五頁による。また収録されている作者(作品)を大きく四つに区分する分類は上掲論文 V. Kontouma(Conticello), “The Philokalia” 内のそれを踏襲している。筆者が日頃から多

大な恩恵に浴している Kontouma 教授には、発行前の論文を頂戴し本稿執筆に使用することをお許しただいた。ここに改めて感謝の意を表したい。

『フィロカリア』構成

―砂漠の師父―

- ・大アントニオス (Antoine le Grand 251 頁-356), *Paraneses* [*Clavis patrum graecorum* (Geerard, 1974-2003, 以下 CPG へ表記) 2347 : sputiae], pp.11-30 (I. pp.4-27)
- ・隠修士イサヤ (Isaie de Gaza 491 頁効), *Asceticon* 27 [CPG 5555:7], pp. 33-37 (I. pp.30-35)
- ・ヒュマクトリオス・ホントイロク (Évagre le Pontique 345 頁-399), *Rerum monachalium rationes* [CPG 2441], pp.41-46 (I. pp.38-43) ; *De malignis cogitationibus* [CPG 2450s = Nil d’Ancyrel], pp.46-56 (I. pp.44-57) ; *Practicus* 29, 32, 91, 94, 15 [CPG 2430s]
- ・カッシヌヌス (Jean Cassien 360 頁-430/35 頁), *De institutis coenobiorum* V-XII [CPG 2266 ; *Clavis patrum latinorum* 513, trad. gr. abrégée], pp.61-76 (I. pp.61-80) ; *Conlationes* I-II [CPL 512; trad. gr. abrégée]
- ・隠修士ペトルロス (Marc l’Érmitte 430 以降効), *Opusc. I. De lege spirituali* [CPG 6090], pp.91-100 (I. pp.96-108) ; *Opusc.*

- II. *De his qui putant se ex operibus iustificari* [CPG 6091], pp.100-113 (I. pp.109-126) ; *Opusc. V. Ad Nicolaum* [CPG 6094s ; 'dubium'], pp.113-123 (I. pp.127-138)
- ・ ムナトキホス (Hesychius le Sinaïte 一〇世紀末<sup>ca.</sup>)、*De temperantia et virtute* [CPG 7862-1], pp.127-152 (I.141-173)
  - ・ ネペロク (Nili d'Ancyre 430 頃没)、*De oration* [CPG 2452s =Évagre le Pontique], pp.155-165 (I. pp.176-189) ; *Liber de monastica exercitatione* [CPG 6946], pp.166-202 (I. pp.190-232)
  - ・ ノホネーターのディオドコロス (Diadoque de Photice 五世紀中葉)、*Definitiones Capita C de perfectione spirituali* [CPG 6106], pp.205-237 (I. pp.235-273)
  - ・ カルパトアホスのエモトホス (Jean de Karpathos 六世紀初葉)、*Capita hortatoria ad monachos in India* [CPG 7855], pp.241-257 ; *Capita theologica et gnostica. C. 93* [CPG 7856s ou 7855 n.(b)], pp.258-261 (I. pp.297-301)
  - ・ エネシカシテネエーロク (Ps.)Theodore d'Édesse 七世紀初葉。八四八年没<sup>ca.</sup>の語<sup>ca.</sup>多教<sup>ca.</sup>)、*Capita C* [Compilation (IX<sup>e</sup> s.?) de divers extraits d'Évagre], pp.265-281 (I. pp.304-324) ; *Theorêtikon* [Anon., XVIII<sup>e</sup> s.], pp.281-287 (I. pp.325-332)
- 神学者と七世紀から一二世紀の著作家 —
- ・ 聖職者トマシホス (Maxime le Confesseur 580 頃-662), *Capita de caritate* [CPG 7693], pp.291-330 (II. pp.4-51) ; *Capita theologica et oeconomica* [CPG 7694], pp.331-362 (II. pp.52-90) ; *Capita XV* [CPG 7695], *Diversa capita ad theologiam et oeconomiam spectantia deque virtutis et vitio* [CPG 7715s ; 'spuria'], pp.362-439 (II. pp.91-186) ; *Orationis dominicae expositio* [CPG 7691s], pp.440-453 (II. pp.187-202)
  - ・ ニコトタトシホス (Thalassius 七世紀初葉), *Centurie IV de caritate et continentia* [CPG 7848], pp.457-473 (II.205-229)
  - ・ タトスロクのエモトホス (Jean Damascene 675 頃-749 頃), *De virtutibus et vitis* [CPG 811], 'spurium'], pp.477-482 (II. pp.232-238)'
  - ・ Anonyme トペノギン<sup>ca.</sup> (Abba Philemon 六世紀初葉), *Περί του Ἀββά Φιλίμωνος* [VIe-VIIIes. ; DS 12, 1340 §14], pp.485-495 (II. pp.241-252)
  - ・ テオグノストス (Theognoste 生没年不詳。九世紀頃<sup>ca.</sup>)、*Περί πρᾶξέων, θεαγίας και ιεραουνης, κερφ. οε'* [XIII<sup>s.</sup> ; DS 15, 443-5], pp. 499-511 (II. pp.255-271)
  - ・ シナインのフィロホス (Philothee le Sinaïte 一一一一世紀前半<sup>ca.</sup> 九一一〇年没<sup>ca.</sup>の語<sup>ca.</sup>多教<sup>ca.</sup>)、*Capita de temperantia* [CPG 7864], pp.515-525 (II. 274-286)
  - ・ エリアス・エタデーロク (Élie l'Ékdikos 一二世紀初葉),





・タサントプロスのカリヌトスとメヌナテオトス(Calliste & Ignace Xanthopouloi | 四世紀頃) *Méthodos kéφ. p' [cf. PEB 18, p.201], pp.1017-1099 (IV, pp.197-295)*  
 ・総主教カリヌトス(Calliste I Patr. De C/p/e 1363 跋) (PLP 20820), *Περί προσευχῆς* (14 c.) [cf. DS 12, 1342, n°28], pp.1100-1102 (IV, pp.296-298)  
 ・カリヌトス・テリロフニス(Calliste Angelikoudes Telikoudes | 四世紀) (PLP 145), *Λόγοι ἅ περι ἡσυχαστικῆς τηρῆς*, pp.1103-1107 (IV, pp.368-372)  
 ・和名不明 [Calliste Angelikoudes?], *Περί προσευχῆς καὶ προσοχῆς* [DS 12, 1342 §30], pp.1107-1109 (IV, pp.373-375)  
 ・カリヌトス・カタフキオトス(Calliste Kataphygiotes | 四世紀) (PLP 11466), *Περί θείας ἐνώσεως καὶ βίου Θεωρητικῶν*, pp.1113-1159 (V, pp.4-59)

— 初心者に必要の書 —

・テホロニケのシムネオン(Symeon de Thessalonique 1429/30 跋) (PLP 27057), *Διάλογος-Περί τῆς θείας προσευχῆς* (c.296-297) [éd. de → Dositheé(Jassy 1883), p.210 sq. = PG 155, 544-549], pp.1160-1162 (V, pp.60-62)  
 ・和名不明 Marc Eugenikos | 五世紀, *Περί τῆς τοῦ Ἰησοῦ εὐχῆς* [YB 71; en grec modern], pp.1163-1167 (V, pp.63-68)

・和名不明 Anonyme, *Ἐμπνεΐα τοῦ Κυρίου ἐλέησον* [en grec modern], pp.1168-1170 (V, pp.69-72)

・和名不明 (新神学書) Symeon le Nouveau Theologien, *Λόγος κβ' περι τιότεως* [en grec moderne; texte original : SC 104, 364-392], pp.1171-1177 (V, pp.73-80); *Méthodos τῆς τηρῆς προσευχῆς* [en grec modern; texte original : Ochr IX/36, p.150-172], pp.1178-1185 (V, pp.81-89)

・和名不明 (シナヤのシニコトス) Grégoire le Synaïte, *Περί τοῦ πῶς πρέπει νὰ λέγει ὁ καθένας τὴν προσευχὴν* [en grec moderne; cf. Kirivochéine 1964], pp.1186-1197 (V, pp.90-103)  
 ・和名不明 [Theophane de Batopédi | 四世紀頃] (PLP 7616), *Βίος Μαξίμου Καυκοκαλύβη* [en grec moderne; cf. Analecta Bollandiana 54], pp.1198-1201 (V, pp.104-107)

・和名不明 Anonyme [=Athanasius of Paros?], *Βίος Γρηγορίου Θεσσαλονικῆς* [en grec moderne; source principale : Philothée Kokkinos, PG 151, 573 B-574 A], pp.1202-1206 (V, pp.107-112)

(ε) 日本以外の各国における『フィロカリア』翻訳の経緯については V. Kontourna (-Conticello) “The Philokalia” (十掲論文), pp.459-463, を参照。また、ギリシア語原文(ウエネチア一七八二版とアテネ一九五七—六三版)・教会スラブ語訳(一九七三版および一九九〇版)・ロシア

語訳(一八七七一八九版および一九六三―六六版)、現代ギリシア語訳(一九八四―八七版)、ルーマニア語訳(一九四六―九一版)、フランス語訳(一九七九―九一版と一九九五版)、英語訳(一九七九―九五版)、イタリア語訳(一九八二―八七版)における収録作品の異同をそれぞれ頁数とともに一覧表にまとめたものが E. Citerio and V. Conticello, *La Phitocchie et ses versions* (上掲論文), pp.1000-1021.

- (4) ただし、「都にはカトリックの大司教の冠ミトラよりも、トルコ人のターバンがはびこる方がましである」と述べたルカス・ノタラス大公の言葉は、当時の多くの正教信徒の気持ちを代弁していたという。Richard Clogg, *A Concise History of GREECE*, Cambridge, 2002, p.7. (邦訳『ギリシヤの歴史』高久暁訳、創土社、二〇〇四年、二三頁)。
- (5) 他にもユダヤ人のミットレト、グルジアのアルメニア人のミットレト、カトリックのミットレト、そして一九世紀にはプロテスタントのミットレトも存在したとさう。Ibid., p.10. (邦訳一四頁)。
- (6) たとえば、法廷においてイスラム教徒に対するキリスト教徒の反論は認められず、キリスト教徒とムスリムの結婚もできなかった。また、キリスト教徒は武器の所持を禁じられ、特別税を支払う義務を負った。Ibid., p.14. (邦訳一八頁)。

(7) T. Ware, *The Orthodox Church*, London, pp.46-47.

(8) Ibid., pp.52-53.

(9) Hieromonk Patapios and Archbishop Chrysostomos, "The Decline in the Frequency of Communion in the Christian East", *Manna from Ahos The Issue of frequent Communion on the Holy Mountain in the Late Eighteenth and Early Nineteenth Centuries* 所収、Peter Lang, 2006, pp.12-13.

(10) この運動には、①西洋の古典研究への尊敬、②ヴォルテールやフランス百科全書派を中心とする啓蒙主義、③フランス革命思想(フランス革命は『フィロカリア』出版の七年後)、④フリーメイソンの擬神秘主義の影響があると言われたらう。K. Ware, *THE HESYCHAST RENAISSANCE in The Study of Spirituality*, ed. Cheslyn, Wainwright, Yarnold, London, 1986, pp.255-259.

(11) R. Clogg, 上掲書、pp.25-26. (邦訳二五―二六頁)。

(12) 以下コリユヴァテスにうつづは Hieromonk Patapios and Archbishop Chrysostomos, 上掲書、pp.27-52.; C. Cavarnos, *St. Macarius of Corinth*, Vol.II in *Modern Orthodox Saints*, Belmont, MA, 1975, pp.15-29.; G. Podskalsky, *Griechische Theologie in der Zeit des Türkenherrschaft* 1453-1821, Munich, Beck, 1988, pp.329-385.

(13) 一七七二年、総主教テオドシオ二世「土曜日に追悼儀式を行う者は、古代からの教会の伝統を守っており、正しい。

- だが他方、日曜日に行う者も罪を犯してはいない」。後のサミュエル・カンチエレス総主教「僧庵<sup>スケート</sup>で霊的生活を送る修道士は、その修道院に属し服するのであり、追悼儀礼に関しても自らの属する修道院の規則と慣習に逸脱する」となく従わねばならぬ」。C. Cavarnos, 上掲書, p.17.
- (14) 一七七四年、アトス地方公会議「総主教の決定を受け入れないものは破門する」、一七七六年コンスタンティノール地方公会議「追悼儀礼は土曜日曜の区別なく行われなければならない」<sup>17</sup>。ibid, p.17.
- (15) Ibid, p.21.
- (16) ニコデモスとマカリオスの生涯について詳細はC. Cavarnos, *St. Nicodemus the Hagiote*. Vol.III in *Modern Orthodox Saints*, Belmont, MA, 1974, pp.11-63. 及び上掲書, pp.11-41. を参照。
- (17) 聖コスマスはギリシア啓蒙運動の著名な人物で、正教徒に学校建設とコイナーの習得を奨励し、それによって各自が聖書理解深め霊的成長をとげるべく尽力した。彼は六〇年間にわたって一〇〇以上の学校を建設したと言われている。C. Cavarnos, *St. Cosmas Aitolos*. Vol.I in *Modern Orthodox Saints*, Belmont, MA, 1971.
- (18) 後にニコデモスはローマ・カトリックの精神性に関心を抱き、Giovanni P. Pinamonti 版によるイグナチオ・ロヨラ『靈操 *Esercizi Spirituali*』<sup>18</sup> Lorenzo Scupoli の『心戦 *Combattimento Spirituale*』をギリシア語訳し、大幅な削除と加筆を加え、聖書と教父に基づく注釈を施した上で出版している。
- (19) これに対し、マカリオスがアトス山に到着したのはニコデモスよりも先であるとする研究もある。cf. V. Kontouma (Conticello), "The Philokalia" (上掲論文), pp.455-456.
- (20) 『フィロカリア』編纂におけるニコデモスとマカリオスの役割、およびその底本となる写本の収集経緯に関して、V. Kontouma (Conticello) "The Philokalia" (上掲論文), pp.453-456 に詳しい。
- (21) その中には、『詩篇註解』や、『階梯』と呼ばれる教会法の編纂といった、その後の正教会で必要不可欠な手引書となる書物も含まれている。
- (22) 以下、引用は邦訳『フィロカリア』、新世社、二〇〇七年、第一巻の序、三七―五〇頁に拠った（一部、本稿での用語に合わせて改訳した）。
- (23) 『フィロカリア』出版当時のギリシア国内における反響の少なさについて、マカリオスやニコデモスによるこのような教会当局への批判的姿勢、あるいは彼らの『頻繁な聖体拝領について』が一度は断罪されたことの影響によるものであると推察することができる。更に V. Kontouma (Conticello) は当時の正教神学界における、より古典的な

作家（たとえばカエサリアのバシレイオス、ナジアンゾスのグレゴリオス、ヨアンネス・クリュソストモス、ディオニュシオス・アレオパギテースやダマスコのヨハネなど）への偏向傾向をその一因として挙げている。“The Philokalia”（上掲論文）、p.459.

- (24) この『パラマス伝』の作者は不詳であるが、ニコデモスらフィロカリア編纂者の一人であるか、あるいは彼らに近しい同時代の人物である可能性が高いと考えられる。° Cf. Rigo, *Nicodemo l'Aghiorita e la Filocalia*, Magnano 2001, pp.151-152.